

カンティロンとチュルゴ*

——古典派的利潤論の形成における企業者概念の意義——

金子 創

I はじめに

本稿では、アダム・スミスの『諸国民の富の本質と原因にかんする研究』(*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776; 以下、引用する場合には WN と略記)による古典派の成立という経済学史上の1つの局面について考える。研究史における1つの典型的解釈によれば、古典派は生産費説体系として生産と分配の観点からとらえられる。すなわち、古典派は各財の生産要素として土地、労働および「資本」(capital)を想定し、またそれぞれの要素に対応する報酬として地代、賃金および「利潤」(profit)が何らかの決定原理を通じて定まると考えた、と (cf. Schumpeter 1954, 557-61 / 訳 334-43; Meek 1967, 18-22 / 訳 25-31)。

こうした典型的解釈にもとづけば、スミスの理論的貢献 (の1つ) は資本と利潤との対応原理、すなわち、投入される資本の規模に応じて利潤の水準が決定されるという原理的説明、の存在を示唆した点に見出される。そのことは、資本利潤対応原理を見出すための分析的枠組みがスミスによって採用されたことをも含意する。他方、もし資本/利潤に関する原理的説明の発見をスミスの理論上の貢献とみなすとすれば、スミスに先行する諸学説においては、そのような原理は認識されていなかった、あるいは別の異なる原理 (の存在) が認識されていた、と整理しうる。そのような観点から、スミスとそれに先行する諸学説との対比を考えるとすれば、後者は資本や利潤に関する原理を含まない、あるいは別の異なる原理を含む分析的枠組みを採用していたと予想される。そこで本稿では、古典派についての典型的解釈の下での図式を、古典派に先行する学説に遡ることで再検討し、またそのような再検討を通じてそれぞれが採用していた枠組みの特徴についての評価を試みる。

さて、古典派に先行する学説を上述の図式との関連で解釈するならば、まず生産面に関して資本の役割が認識されていたかどうかは明らかではなく、またそのために分配面に関して利潤の

* 本稿は慶應義塾大学大学院博士課程学生研究支援プログラムによる助成を受けた研究の一部としてまとめられたものである。

存在やその位置づけは不明瞭であった。したがって、資本の役割の明示やそれに対応する資本利潤の記述がスミスの理論的な貢献と理解しうる¹⁾。もちろん、こうした認識はスミスのみによって成立したとは言えない。たとえば、Aspromourgos (1996, chap. 9; 2009, chap. 4) によれば、スミスに先行する各学説においても生産面に関する資本の役割を示唆する記述が少なからず存在したし、また、Meek (1962, 297) に指摘されるように、利潤という用語それ自身がそれぞれの定義で用いられた。したがって、分配面に関して利潤はどのような定義で、どういった過程を通じて、どの主体に分配されると考えられていたか、といった解釈が要請されることになる。また、そうした利潤が生産面における主体の行動を通じて資本の役割とどのように関連していたか、といった疑問も生じるであろう。いずれにせよ、学説史上では、そうした学説・思想間における種々の概念上の変遷を経て、スミスによって古典派的枠組みが成立した、とみなしうる。ここで仮に諸学説がそれぞれ古典派的とは異なる原理による説明を与えていたと解釈できるのだとすれば、その対比を通じてそれぞれの分析的枠組みの特徴を評価しうる。したがって、本稿はそうした資本および利潤概念に関する原理的説明を含むであろう枠組みの変化についての検討を目的とする。その場合に、特にカンティロン (Richard Cantillon, c. 1680/90-1734) とチュルゴ (Anne Robert Jacques Turgot, 1727-81) に着目する。

ところで、上述の資本/利潤に関する古典派的な枠組みは次の特徴をもつと考えられる。すなわち、(a) ある所与の消費水準 (たとえば、生存水準) を超過する所得部分については正常に貯蓄され²⁾、また (b) 資本市場が十分に機能しており、その貯蓄は何らかの投資機会に向けられる。さらに、(c) その投資の結果として資本蓄積が実現される³⁾。それに対して、古典派に先行する諸学説が上の各特徴を想定したかどうか、あるいはどのように想定したか、という点については明らかではない。いくつかの学説は (a) 何らかの特定の階級が一定の消費水準を超える所得を受け取ると想定した。しかし、既に上で述べたとおり、生産における資本の役割が明確に認識さ

-
- 1) 本稿では、それぞれの思想・学説において資本の規模に対応する報酬の水準が認識されていたと考えられる場合に限って、それを資本利潤と呼ぶ。それ以外を意味する場合についての用語法については、その都度与えることにする。
 - 2) なお、スミスの生存水準に関する記述には、カンティロンへの直接の言及も含まれる。「人間はつねに働いて生きてゆかねばならないし、彼の賃金は少なくとも彼の生活を維持するに足りるものでなければならない。こうした理由からカンティロン氏は、最下層の労働者でも、平均して2人の子供を育てるためには、自分自身の生活維持費の少なくとも2倍はどこへ行っても稼ぎださねばならない、と考えている」(WN 85/訳 116)。この記述は、本稿における論点 (a) が (少なくともカンティロンとスミスとの間においては) 共有されていたことを示唆する。
 - 3) Groenewegen (1971, 337-38), Brewer (1995, 609) を参照されたい。Groenewegen (1971) はチュルゴにおける資本/利潤の認識に関する特徴として、これらに対応する条件を挙げている。また Brewer (1995, 634-35) は、これらの3つの条件によって古典派における成長 (growth) の認識を特徴づけている。これらはいずれも資本/利潤に関わる条件であり、本稿で取り扱う課題においても有用なベンチマークとなる。

れていたとは言えないため、(b) 其の超過部分が投資機会に向けられるかどうか、あるいはどのような投資機会に向けられるか、といった点が明らかではなく、したがって (c) 資本蓄積の可能性も十分に記述されていたとは言えない。そこで本稿では、これらの特徴について検討し、それらの特徴の相違をもって資本/利潤に関する古典派的枠組みの成立局面の様相を描写することにしたい。なお、本稿では、カンティロンとチュルゴとの間の、あるいはそれらにスミスを加えた3者間の影響関係は直接取り扱われない。本稿の主要な目的は、スミスによって採用された資本と利潤との対応原理を支持する分析的枠組みは経済現象の認識の仕方をどのように変えたか、という問題を検討することである。この問題は、スミスに先行する諸学説は経済をどのように認識したか、という点に関する解釈の必要性を含意しており、本稿ではそうした解釈が取り扱われる⁴⁾。

こうした観点からは、上で言及したようにカンティロンとチュルゴが興味深い。まず両者はともに「企業者」(entrepreneur) と呼ばれる、所得の変動の危険に直面している主体を考え、特に生産過程の局面においてその一定の役割を想定した。その企業者の所得に関して、一定の消費水準に対する超過の、そしてその超過部分の貯蓄の可能性が(本質的に)記述されていたのであって、そのことは (a) の論点に関連する。しかし、(b) および (c) の論点に関連して、両者の想定は大きく異なっていたと考えられる。また、企業者の想定は、当初のいくつかの問題意識とも関連する。すなわち、そもそもそうした企業者の所得における上述の超過部分がどのような過程を通じて発生しているか、あるいは、利潤がどのように定義され、その超過部分とどのように関係するか、といった論点である。したがって、上の (a)-(c) に加えて (d) 企業者の所得が生産面における企業者自身の行動およびその場合の資本の役割と関係するかどうか、といった想定についての解釈を要する。なお、カンティロンおよびチュルゴは企業者以外の階級、たとえば地主の役割についても論じており、特にカンティロンは(経済全体の記述という意味では)むしろ地主の計画者としての役割を強調した (e.g., Walsh and Gram 1980, chap. 2; Brewer 1988; 1992, chaps. 2, 5; Berdell 2009; Kaneko 2012)⁵⁾。しかし、本稿の課題においては企業者の位置づけが重要となる。

さて本稿では、資本/利潤に関してカンティロン、チュルゴおよびスミスの、それぞれ互いに関連しあう諸概念を、上述の論点 (a)-(d) による検討を通じて概観した。その結果、古典派的枠組みの成立の局面においては、経済現象を記述する上での企業者の役割に関して次の解釈が導

-
- 4) 資本/利潤に関するチュルゴとスミスとの間の影響関係については、伝記的および書誌的情報にもとづいて推論されることが知られる。たとえば、Meek (1967, 30-32/訳43-46)によれば、スミスの分配面における利潤概念の確立時期は1764年のフランス渡航後、特にチュルゴとの交流以降であった、と推測される。実際、それ以前の、いわゆる「国富論の初期草稿」やグラスゴウ大学における「法学講義」においては、利潤概念が明確であったとは言い難い。
- 5) 津田(1992)や米田(1993; 2005, 第3章)は、地主の計画に対応する静態的な経済をカンティロン体系の1つの特徴にとらえた上で、企業者についてのいくつかの記述が静態的な体系と整合しないことを指摘している。

かれた。すなわち、危険負担という側面が後退し、それとは対照的に資本による企業の経営という側面が強調され、また同時に労働の質に関する位置づけも変化した、という解釈である。そのことは、資本と利潤との対応原理の発見には、経済分析における主体あるいは階級の役割に関して一定の制限を必要としたことを示唆する。さらにこうした解釈に伴って、経済の長期状態に関するそれぞれの記述において企業者概念が果たす役割についても明らかになり、それぞれの体系間のより正確な対比が可能となった。

従来の個別研究では、それぞれの体系のもつ古典派的特徴について着目されている。カンティロンについては、(資本/利潤概念との関連という問題意識に限っても) Spengler (1952; 1954), Hollander (1987, 29-30/ 訳 37-38), Prendergast (1991), Brewer (1992, chap. 4) などによって古典派との(条件付きの)相似関係が指摘され、チュルゴに至っては古典派の基礎として位置づけられ、(何らかの意味で)同一の特徴をもつ体系とみなされる(e.g., Groenewegen 1968; 1970; 1971; 1983; Brewer 1987; 1995)。しかし、それぞれの体系がどのような観点から区別され、また特徴づけられるか、ということについては依然として明らかではない。他方で、それぞれの企業者概念についての研究として、カンティロンに関して古くは Hoselitz (1951) や、近年では Asprougorgos (2012a) などが、またチュルゴに関しては Pelletier (1990), Fontaine (1991; 1992a; 1992b; 1993) などが知られる。カンティロン、チュルゴ、いずれの体系においても企業者は重要な役割を果たすと考えられているが、その役割についての対比という意味では必ずしも明らかにされていない。したがって、本稿の課題は、資本/利潤に関する古典派的特徴の有無という観点を主体や階級の扱いとの関連づけにおいて整理し直し、その下で学説史上における古典派の分析的枠組みの成立局面を評価すること、と要約されるのである。

以下、本稿の構成は次のようになっている。第 II 節は、カンティロンおよびチュルゴの諸概念、それぞれを本稿の課題にもとづいて検討する。ついで第 III 節では、それらの検討を通じて得られた諸概念の変遷を整理し、その含意を述べる。最後に第 IV 節で、以上から得られた結果を考察し、またその研究史における位置づけを述べ、論文を終える。

II 諸概念の検討

1. カンティロンにおける企業者利潤

まずカンティロンにおける諸概念を、論点 (a)-(d) について検討する。カンティロンは、その小著『商業一般の本性にかんする試論』(*Essai sur la nature du commerce en général*, 1755; 以下、引用する場合には *Essai* と略記) で、原理的には土地と労働のみを生産要素とみなしたのであって (*Essai* 1 / 訳 1), 生産過程における資本の役割を認識していた、とは言えない⁶⁾。しかし、「利潤」という用語を、たとえば次のように記述した。

借地農は普通、土地の生産物の 3 分の 2 を受けとる。一方の 3 分の 1 は彼らの費用を償

い、かつ彼らの補助者たちを維持するためのものであり、他方の3分の1は彼らの企業の利潤としてのものである。(Essai 26 / 訳 30)

借地農は三つの地代を生みださねばならない…。すなわち、一、彼が地主に支払う主要な、そして本当の地代であり、…第二の地代は彼自身の生計の維持と、彼の農場の耕作に使っている人間と馬の維持とのためのものである。そして最後に、第三の地代は彼の手もとに残って、彼の企業に利潤をあげさせるために用いられるべきものである⁷⁾。

(Essai 68-69 / 訳 81)

こうした記述は一見、カンティロンの利潤概念が資本利潤を含意していた可能性を示唆する⁸⁾。しかし、借地農は「他の諸地域における隷農の監督に相当し」(Essai 23 / 訳 27)、そうした監督には「彼らもっている信用と権限とに見合った特典を与え」(Essai 19 / 訳 23)られる、といった説明も存在するため、利潤の一部は借地農の監督労働に対して発生すると想定された、とも解釈しうる。これらの資本および監督労働、それぞれに関連づけられた利潤水準についての記述は、それぞれが利潤水準の決定原理における説明要因として互いに識別されていない可能性を示唆する。そこで本稿では、その利潤を獲得しうる借地農が「企業者」と想定された事実に着目する(Essai 23 / 訳 28)⁹⁾。

カンティロンにおいて、一国の階級は地主とそれ以外とで区別され(Essai 25 / 訳 30)、さらに後者に関しては、給与の取得者(gens à gages)と「企業者」とに分類された(Essai 31 / 訳 37-38)。ここで後者の分類に関して、給与の取得者は一定の賃金水準の下で労働する主体を、また、企業者は「いわば一定していない給与の取得者のようなもの」、すなわち、その所得の変動の危険性に直面する主体として定義される(以下、「危険」という用語は所得の変動に関する場合のみに用いる)¹⁰⁾。本稿の課題においては、こうした変動する企業者の所得の構成が興味となる。たとえば、Prendergast (1991, 428)によれば、カンティロンにおいて(a)利潤は一定の消費水

6) こうした見解は研究史において論争的であるが、少なくとも、カンティロンが資本/利潤概念を認識していたとは安直に主張できない。Aspromourgos (1989; 1996, 82-83, 117-19; 2009, chap. 3, note 67), 金子 (2012, 93-94) も参照されたい。

7) こうしたカンティロンにおける生産と分配の齟齬および資本の位置づけに関しては、古くはSpengler (1952; 1954)の指摘による。Aspromourgos (1996, 116-19), 金子 (2012, 93-94) も参照されたい。他方で、Prendergast (1991)は、カンティロンが利潤率均等化のメカニズムを示唆していたと解釈し、ついで資本利潤の可能性を指摘する。この点に関して、Brewer (1992, chap. 4)は、カンティロンにおける資本利潤を認めないものの、均等化に関する解釈には同意している。

8) これらの記述は三つの地代論として知られる。たとえば、米田 (2005, 112-16)は、こうした分配を部門間・主体間の取引に関する想定と結びつけて解釈し、フランソワ・ケネーと関連づけている。その意味で、しばしば重農学派との関連の上では重要と考えられるが、本稿では特に問題としない。津田 (1992, 247)も参照されたい。

9) 実際、Prendergast (1991, 421)はこうした利潤の規則的な発生を解釈しうる記述から、カンティロンにおける資本利潤の可能性を見出している。

準を上回る所得の部分の意味し、(消費水準を所与とすれば) 企業者の定義上、その所得として利潤が発生しうる(以下、この意味での利潤を「超過利潤」と呼ぶ)。このとき、上の企業者の定義によれば、借地農を含むいくつかの具体的な職業は企業者という抽象的な主体によってとらえられていた、と解釈される。さらに、超過利潤は、その定義の仕方から企業者の定義、すなわち所得変動の危険への直面ということのみによって発生していると解釈されることに注意されたい。実際、前者に関してカンティロンは様々な職業を企業者と同定し、その性質を一括して記述した。

たとえば、「抱えている仕事に合わせて職人たちを使う」「靴屋、仕立屋、指物師、かつら師などのような親方職人たち」(*Essai* 31 / 訳 37) が企業者と同定されたが、こうした親方職人は、前払い賃金基金を必要とするという意味において、恐らく資本を所有する企業者と言えるであろう。これに対して、「自分自身の労働以外に別段の開業資金を必要としない。…渡り職人、鋳掛屋、繕い女、煙突掃除夫、水売り人」や「自分の労働だけで芸芸と学問に生きる」「画家や医者や弁護士など」(*Essai* 31 / 訳 37) は資本を持たない企業者であり、またそれぞれの労働の質において多様と言えるであろう。これらの例から、ある主体が企業者と同定される場合、その主体の資本の有無や労働の質とは必ずしも関連しない、と推測される。もしそうであれば、企業者の超過利潤が資本の規模や(監督労働のような)特定の労働によって原理的に説明された、と解釈することは難しいであろう。さらに、一定の給与の取得者の例として「俸給を受ける将軍や年金を授かる廷臣や給金をもらう召使い」(*Essai* 31 / 訳 38) などが挙げられたことに注意すれば、カンティロンは労働の質とは無関連に階級を分類した、と考えることも可能である。したがって、監督労働に対応する超過利潤が常に企業者の利潤であるとは言えない。実際、一例として挙げられた地主に雇われる監督(*Essai* 33-34 / 訳 40) は定義上、給与の取得者であるため、その超過利潤は(発生すると想定されたとしても) 企業者の利潤とは言えない。

さて、上のように考えれば、企業者はおおむね所得変動の危険性のみによって定義されたと解釈されるが、もし利潤が企業者との関連づけによって記述されたのだとすれば、利潤は所得変動の危険に応じて発生する超過利潤としてとらえられた、と解釈しうる。言い換えれば、それぞれの職業における個別具体的な利潤の獲得要因は、主にそれらに共通する所得変動の危険という側面から説明された、と考えられるのである(cf. Brewer 1988, 7; Aspromourgos 2012a, 114-15; 金子 2012, 87)。こうした解釈にもとづけば、(d) 超過利潤は(上述の定義からして) 資本と本質的に

10) したがって、本稿では(借地農を含む) 企業者の利潤に着目する。カンティロンは、(上の引用箇所がそうであるように) 利潤の説明に際して借地農の所得を例として多用した。それゆえ、研究史ではしばしば農業利潤を強調した解釈が与えられる(e.g., Walsh and Gram 1980, 20; Vaggi 1988, 2)。しかし、カンティロンは製造業部門における利潤を想定し、また製造業部門における親方職人を企業者と見なしていた(*Essai* 23 / 訳 27-28) ことから、その利潤概念を農業利潤のみに限定して解釈する必然性はない。Prendergast (1991, 425)、金子(2012, 88-91) も参照されたい。

関連しないであろう。なぜなら、ある企業者が資本を所有しているや否や、あるいは（資本を所有していたとして）資本を用いることで超過利潤を獲得しているや否やは、その企業者の個別具体的な事情によるからである。実際、カンティロンは企業者に関して次のように記述した。

彼ら〔企業者〕が自分の企業を経営する資本をもって自立していようと、あるいは何らの資本もなく自分自身の労働によるだけの企業者であろうと同じであって、彼らは不確かな生計の人々とみなされてよいのである。（*Essai* 31-32 / 訳 38 [[] 内は引用者による]）

同様の解釈によれば、ある企業者が借地農や親方職人のように監督労働に従事しているや否や、あるいはその監督労働によって超過利潤を獲得しているや否やは、その企業者の個別具体的な事情に過ぎない。したがって、（監督労働を含む）特殊労働や資本投入は、企業者が超過利潤を獲得するための諸要因の1つに過ぎない、と整理できる¹¹⁾。

ここで超過利潤（あるいは、企業者）の定義上、それが常に発生するとは限らず、場合によって企業者の所得は所与の消費水準を下回りうる、すなわち損失が発生しうることに注意されたい。またこのことは、超過利潤の水準が（企業者が概念として様々な職業を含むという定義に対応して）多様でありうることをも含意している（cf. 金子 2012, 94）。

さて、カンティロンは、企業者の所得として超過利潤が発生しうることを想定したが（*Essai* 112 / 訳 129-30）¹²⁾、(b) その部分が貯蓄された場合の用途として、次のように土地の購入を記述した。

…ある有力な企業者とかが、もしも財貨すなわち富を蓄積したとすれば、…彼がこの資産の限りにおいて、正当に自立自存の人とみなされうるということは真実である。彼はそれを自由に処分して抵当権を手に入れることができるし、土地を担保にして借入れをすれば、地代と公債の利子を得ることができる。すなわち彼は小さな地主よりはよほど良い暮らしができるし、またいくつかの土地の所有権を買いとることさえできるのである¹³⁾。

（*Essai* 32 / 訳 38）

-
- 11) たとえば、Aspromourgos (2012a, 116) によれば、カンティロンにおいては所得変動の危険負担によって特徴づけられる企業者機能の諸要因の1つとして特殊労働が含意されていた（*Essai* 23 / 訳 27-28; cf. 金子 2012, 87-90）、と解釈しうる。他方、金子（2012, 93-94）によれば、そうした活動は信用力（credit-worthiness）、いわば資本の調達能力を意味していたのであって、その信用力と資本の規模とが関連づけられていた。したがって、企業者の危険負担機能の諸要因の1つとして資本に関する能力が含意されていた、と解釈しうる。
- 12) ただし、該当の箇所は、厳密には消費水準に対してではなく、地代および前払いなどを含めた部分に対する超過部分を意味しており、その文脈では明らかに生産過程において資本の投入が想定されていた、と言える。しかし、そのとき、こうした超過部分が資本利子（利潤）とどのような関係にある（と想定された）かは依然として不明瞭であり、資本利潤が認識されていた、とは言えない。
- 13) Berdell (2009, 241-43) によれば、企業者による地主からの土地所有権の購入に関する記述は、カンティロンが階級間の流動性を想定していたことを示唆する。

カンティロンが超過利潤の貯蓄の投資先として明示的に記述したのは、こうした土地の購入に限られており、したがって、(c) 生産過程において資本蓄積が実現すると想定されていたかどうかとも明らかではない。実際、カンティロンにおいてそうした資本蓄積を通じた生産拡大や長期的な経済成長といった想定はほとんど認められない (cf. Brewer 1995, 616)。

2. チュルゴにおける資本による企業経営

ついでチュルゴについて検討する。チュルゴは (主に) 『富の形成と分配にかんする諸考察』 (*Réflexions sur la formation et la distribution des richesses*, 1766; 以下、『諸考察』と、また引用する場合には *Réflexions* と略記) で、資本/利潤の認識を明確に示していたと考えられ、その観点からは本質的にスミスと区別されない¹⁴⁾。しかし他方で、「企業者」という用語によって特定の階級を表した点でカンティロンと共通している¹⁵⁾。チュルゴは、たとえば、農業部門における企業者の所得の構成に関して次のように記述した。

彼ら〔耕作企業者〕は、製造企業者のように、彼らの資本の回収、すなわちいっさいの原前払いと年前払いの回収の他に、一、彼らがなんら労働しなくてもその資本で獲得しうるであろう収入と同額の利潤、二、賃金と彼らの労働、危険および技能の価格、三、彼らの企業で使用される動産の消耗つまり家畜の死亡、道具の損傷などを年々補填するに必要なものを、取得しなければならない。 (*Réflexions* 570 / 訳 99 [[] 内は引用者による])

上の引用部分において、チュルゴは資本の生産過程における役割とそれに対応する報酬としての資本利潤を明示したと考えられ、その点に関しては確かに古典派と同一視できるであろう。し

14) チュルゴの、生産面における資本の貢献および分配面における利潤の分類、それぞれの認識という意味でのスミスとの比較については Groenewegen (1968, 286-87; 1971, 334; 1983, 588-89), Vaggi (1988, 4-6) などを参照されたい。さらに、チュルゴにおいては資本市場における競争の結果としての資本利利率の均等化原理 (cf. Groenewegen 1971, 336-37) やマルサス・ウェスト・リカードウの地代/利潤理論——すなわち、地代の発生しない限界地の条件から利潤率が定まる——が実質的に記述されていた (cf. Brewer 1987, 426), ととらえられる。

15) Pelletier (1990) は、企業者概念に着目した上で、そこから資本概念を明確に区別したことをチュルゴの学説史上の理論的貢献ととらえる。それに対して Fontaine (1991; 1992a; 1992b; 1993) は、チュルゴにおいて企業者概念と資本概念が両立している点に着目し、とりわけ資本家的企業者 (capitalist entrepreneur; capitaliste entrepreneur) の資本蓄積における役割を強調している。こうした資本蓄積に関する資本家的企業者の機能およびその歴史的な位置づけについては Karayiannis (1990, 248-49) を参照されたい。また、中川 (2007, 100-03; 2010, 78-81; 2011a, 32-33; 2011b, 41-43) もこうしたチュルゴにおける資本家的企業者に学説史上の独自の意義を見出している。いずれの先行研究も企業者の資本の調達能力という観点からチュルゴの資本家的企業者の役割を強調している、と言える。ただし、資本の調達能力という観点をカンティロンの記述に見出すことは十分に可能であり、もしそうであればその点に関するチュルゴの経済学史上の独自の貢献は (先行研究で指摘されるよりも) 相対的に弱い、と言える。注 11 も参照されたい。

かし、同時に資本利潤とは異なる所得の分類として「労働、危険および技能の価格」を列挙した点に注意されたい。それぞれの並列的な列挙は、超過利潤の説明に関して危険負担のみではなく特殊労働も1つの要因として位置づけられたことを示唆する。ここで、まず危険の価格ということに着目するならば、チュルゴは（農業部門に限らず）企業者一般に関して「非常な手腕がないかぎり、借入資金で企業を運営する者は多くの失敗の危険をおかす」（*Réflexions* 601 / 訳 123）と想定したのであって、その意味でカンティロンが想定した所得変動に関する危険に対応する報酬についても認識していた、と考えられる¹⁶⁾。また、チュルゴは危険負担のみならず特殊労働——たとえば、監督能力——に対する報酬をも区別した（e.g., Vaggi 1988, 4-5; Aspromourgos 2012b, 12-13）。したがって、企業者の所得に関して（d）危険負担機能に対する報酬および特殊労働に対する報酬、資本に対する報酬とがそれぞれ明確に区別されていた、と言える。実際、チュルゴは企業者の所得について次のように記述した。

…企業者は、その資本の利子の他に、彼の注意、労働、才能、危険を償う利潤と、その上、変質しやすく、あらゆる災害の危険にさらされる動産にどうしても最初から転換しておかなければならない前払いの年々の損傷の補填のために必要なものを彼に供給する利潤とを、毎年引き出さなければならないのである。（*Réflexions* 591 / 訳 116）

いずれにせよ、（a）それらを併せた報酬は、それを受け取る企業者の消費水準に対する超過部分を構成しうる。チュルゴは、そのような「消費されない年々の生産物の蓄積から生じる」部分を「動産の富」（*richesses mobilières*）と呼び、あらゆる主体がそうした超過部分を貯蓄することに動機づけられている、と説明した（*Réflexions* 562-63 / 訳 93-94; cf. Brewer 1995, 630）。さらに、（b）そうした超過部分の貯蓄は「ただちに」（*sur-le-champ; immediately*）投資されると考えたのであって（*Réflexions* 601 / 訳 124; cf. Faccarello 1992, 264-65），その投資機会として（1）土地の購入、（2）農業、（3）製造業、（4）商業、それぞれの部門における自己金融および（5）貸付を想定した（*Réflexions* 589 / 訳 114; cf. Murphy 2004, 18-19; 2009, 146-47）。ここで（2）-（4）はそれぞれの部門の稼働に要される前払いのための基金が拠出されることを意味するが、（1）および（5）の取引において移動する資金もまた最終的には同じくいずれかの部門の稼働に要される前払いのための基金に供されている、とみなされた。つまり、貯蓄は生産過程に向けられる、と考えられた¹⁷⁾。

…ある人は、それを土地の購入に用い、またある人は、それを利子つきで貸付け、またある人は、それを耕作、工業、商業の有利な諸企業に前払いとして用いている。この最後の用法が資本をただちに流通に回帰させ、それを細別して、諸々の用具、農耕用家畜、原

16) また、『諸考察』以外の文献においても、企業者の危険負担機能に関する記述が確認される（e.g., Turgot [1770b] 1919, 292 / 訳 170）。

料および労働者の賃金と交換し、商業対象としての商品の購入を行うことは言うまでもない。このことは、他の2つの用法についても同様である。不動産取得者の貨幣は売手に渡る。売手は通常より有用なものの獲得のためか、あるいは負債の支払いのために売るのであるから、販売価格は常にこの最終目標に落ち着くのである。というのは、もし最初の売手が別の土地を買うとしても、この最初の売手は、…もっぱら負債の支払いのために売ろうとする第三の売手となるだろうからである。

…彼ら〔債務者〕は身辺を整理するために、支払い期日の来た負債を支払うために、高すぎる利子を生む負債を支払うために借金をする。ある人たちは、彼らが手に入れたと思う不動産の価格の足しにするために借金をする。するとこの借金の目的は、前述の土地獲得のための貨幣使用法の中に含まれるわけである。すなわち、この貨幣は第二、第三の人の手に渡り、商業において再分配されながら流通に帰るのである。企業者、製造業者、商人の借金について言えば、…ただちに彼らの企業に投入され、あらゆる種類の前払いとして使われるのである。（Turgot [1767] 1914, 656-57 / 訳 147 [[] 内は引用者による]）

既に述べたように、こうした投資は企業者の所得における超過部分を損失の危険にさらすことを意味すると考えられる。しかし、チュルゴは、「収入あるいは生活の絶対の必要物以上の年々の利潤をもっているか、あるいは手に入れることであり、それによって資本を形成するために毎年この余剰を保蔵すること」（*Réflexions* 589 / 訳 114）だけが企業者にとっての富裕になる唯一の方法であると記述した。

…この方法によって、人は収入あるいは年々の利潤の増加を手に入れることができ、さらにこれを節約して資本に換えることができるのである。ゆえに、大多数の人が資本を蓄積することに関心を持ち、それに専念しているのである。（*Réflexions* 589 / 訳 114）

したがって、企業者の貯蓄に対する動機づけは¹⁸⁾、一定の利潤を伴う投資が可能な環境の下で維

17) Groenewegen (1968, 278-79; 1971, 331-33) を参照されたい。なお、Faccarello (1992, 261-69) や Murphy (2004, 15; 2009, 144) によれば、こうしたチュルゴの前払いのための基金の拠出に関する想定はケネーおよび重農学派の想定との関連において解釈される。こうした想定において、投資先が農業に限定されていなかったという事実は、チュルゴの体系を重農学派との関連で理解する上では一定の意義をもつと考えられるが (cf. 津田 1962), 本稿では特に問題としない。また、こうした貯蓄から投資への経路において貨幣の機能——価値の尺度機能、価値の貯蔵あるいは交換手段——との関連 (*Réflexions* 562-63 / 訳 93-94) がしばしば強調されるが (cf. Faccarello 1992, 269-77; 中川 2010, 55-56; 2011 a; b; c; 2012), そのような論点は学説史上における貨幣の位置づけの変化を論じる上で重要である。たとえば、Faccarello and Steiner (2012) によれば、18 世紀フランスの知性史における 1 つの理念型としての「経済哲学」(philosophie économique; cf. Faccarello and Steiner 2008) には貨幣的な経済現象を中心的な主題から外す傾向が見られ、特にその傾向はチュルゴによって完結された、と解釈しうる。本稿では貨幣的な経済現象の記述の仕方を捨象しているが、そのことは上述の傾向を踏まえることで (少なくともチュルゴについては) 十分に正当化される。

持され¹⁹⁾、(c) その動機づけが維持される限りにおいて資本蓄積に結びつくと認識されていた、と言える²⁰⁾。

III 比較とその含意

以上で検討されたカンティロンおよびチュルゴの諸概念を整理し、さらにスミスをベンチマークとして考え、それぞれの体系を比較する。まず論点 (d) に関して、スミスは資本利潤を次のように記述した。

資本の利潤とは、ある特定の種類の労働、すなわち監督し指揮する労働の賃金に対する別名に過ぎない、と考える人があるかもしれない。けれども利潤は、賃金とは全然違ったものであり、まったく異なった原理によって規定されるものであって、監督し指揮するというこの想像上の労働の量や辛さや創意とは、少しも比例するものではない。利潤は、用いられる資本の価値によってまったく規制され、この資本の大きさに比例して、大きくもなれば小さくもなるのである。(WN 66 / 訳 82-83)

この記述が正しく本稿冒頭で挙げた典型的解釈の根拠であり、いわば資本と利潤との対応原理についての示唆と理解しうる。もちろん、こうした記述はスミスが危険負担に対応する報酬につい

-
- 18) たとえば、Faccarello and Steiner (2012, 349) によれば、カンティロンは貯蓄に対する動機づけが貨幣の価値の貯蔵機能と結びつくことによって貨幣が資本蓄積をもたらす機能をもつことを示した、ととらえられる。
- 19) たとえば、Murphy (2004; 2009, chap. 6)、中川 (2011c) などによれば、チュルゴはそうした資本市場が十分に機能する環境を必ずしも想定していなかったと考えられる。実際、Faccarello and Steiner (2012, 349) によれば、チュルゴはそうした資本市場の制度に関する議論をも射程に入れていた。ところで、Fontaine (1991; 1992a; 1993) は、チュルゴにおいては資本家的企業者と(資本市場から調達しなければならぬ)無資本の企業者として利潤を実現できる可能性が大きく異なると想定されていたと解釈し、前者の資本蓄積における役割を強調している (cf. 注 15)。そうした主張は、上述の資本市場に関する想定が正しいとすれば、妥当するであろう。ただし、こうした資本家的企業者の機能を示唆する記述はカンティロンにおいても認められる。実際、金子 (2012, 93-94) によれば、カンティロンは企業者の信用力とその企業者の所有・運営する資本の規模とを関連づけていた、と解釈できる。注 11 も参照されたい。しかし、既に述べたように、カンティロンにおいては資本蓄積に関する想定が認められないことに注意すれば、資本家的企業者の機能についての認識だけでは経済の資本蓄積の記述には十分ではないと言える。もしそうであれば、本稿におけるカンティロンとチュルゴとの、またスミスとの比較という課題からは資本家的企業者の性質よりも論点 (b)、すなわち投資機会が存在するか、あるいはどういった投資機会が存在するか、が重要であろう。
- 20) したがって、貯蓄に対する動機づけ (cf. 注 18) は論点 (b)、すなわち投資機会 (cf. 注 19) との関連づけにおいて資本蓄積に結びつく、と整理しうる。その意味で、本稿の観点からチュルゴの資本蓄積に関する記述をとらえるためには貯蓄に対する動機づけ (cf. Faccarello and Steiner 2012, 349) に着目するのみでは十分とは言えない。なお、『諸考察』以外の文献においては、より明示的に長期に渡る資本蓄積が記述された (e.g., Turgot [1770a] 1919, 187 / 訳 160; cf. Brewer 1995, 630)。

で考えなかったことを意味しない。実際、スミスはその点に関して次のように記述した。

完成品を、貨幣なり労働なり他の財貨なりと交換する場合には、原料の価格と職人の賃金とを支払うのに足りる以上の何かが、こうした冒険において自分の資本を危険に晒す企業者 (undertaker) の利潤として与えられるに違いない。(WN 66 / 訳 82)

さて、上のスミスの記述における「企業者」は、自身の所得を構成している資本を危険に晒しているという意味で、カンティロンやチュルゴにおける企業者と同定されうる。しかし、上で見たように「利潤は、用いられる資本の価値によってまったく規制される」と原理的に説明された。もしそのような典型的解釈が成り立つならば、危険負担は利潤という分配上の区分が存在することの正当化として記述されたが、利潤水準の決定原理という意味では本質的ではないと位置づけられた、という解釈も同時に成立しうる。ただし、スミスは所得変動に関する危険負担が利潤の水準にまったく影響しないと考えたわけではない。実際、「資本を種々な方法で用いる場合、利潤の通常率は、その収益が確実か不確実かに応じて、多かれ少なかれ変動する」(WN 127 / 訳 184)、と述べた。しかし、一定のメカニズムの下では「それ〔利潤の通常率〕は危険に正比例して、すなわち危険を完全に償うほどに上昇するとは思われない」(WN 128 / 訳 82 [[] 内は引用者による])と想定したのであり、少なくとも危険負担が利潤水準の決定原理に関する主要因とは見なさなかった、と言える。

さらに、スミスにおいては、それぞれの主体への分配の水準が異なる事実は労働の質の違いによって記述された。実際、スミスの説明は、同規模の資本の異なる部門への投入に関してそれぞれの利潤率が均等化するメカニズムを含意するが、それにも関わらず部門間で利潤率の外見上の差異が観察される事実に関して、次のように記述した。すなわち、「資本の一見大きい利潤から、この労働の報酬にあたる部分を控除してみると、おそらく資本の通常利潤以上にほとんど何も残らないだろう。外見上の利潤の大部分は、…事実上の賃金なのである」(WN 129 / 訳 186)、と。この場合、カンティロンの枠組みが超過利潤の水準の多様性を含意したのに対して、スミスの枠組みはそうした分配の水準の違いを労働の質にもとづく賃金水準の違いに転化した、と対比しうる。こうした対比は、労働の質に関する位置づけの変遷を示唆する。

今、そのような観点からカンティロンとチュルゴとを改めて比較する。前節の議論から、前者は利潤の説明原理を企業者の——特殊労働や資本が混在する——危険負担機能に求めたのに対して、後者は危険負担機能、資本、特殊労働、それぞれに対する報酬を明確に区別した、と整理しうる。ここでチュルゴについては、スミスの資本利潤に関する説明との共通点を見出すことが可能であろう。他方、カンティロンとチュルゴはともに企業者を同様の機能をもつ主体として想定していたのであって、その企業者の活動が生産過程における役割に関しても共通点をもつことに注意されたい。実際、チュルゴは、分配面においては危険、特殊労働および資本に対する報酬を区別したのだとしても、生産面においてはそれらを併せて企業者の役割をなすものと記述した、と考えられる。それに対して、スミスは、上で確かめたように分配面において資本利潤を強調す

ることでカンティロンおよびチュルゴによって想定された企業者の危険負担をあくまでも資本に伴う機能として位置づけ、また特殊労働ないし労働の質に関する議論をすべて賃金水準の違いに還元した、と理解しうる。

いずれにせよ、(a) カンティロンおよびチュルゴは企業者の利潤が消費水準に対する超過部分を構成すると想定し、少なくともチュルゴは、それが正常に貯蓄されると記述した。ついで、(b) カンティロンはそうした超過部分が貯蓄される場合に——そもそも、それが正常に貯蓄されるかどうか明示的ではないが——、土地の購入に向けられるとしたのに対して、チュルゴは生産過程における前払いのための基金が拠出される経路をも記述した。その結果として(c) 両者は資本蓄積の有無に関してまったく異なる想定を与えた、ととらえられる。

さて、カンティロンとチュルゴとは、生産面における企業者の役割に関して想定を共有していた。しかし、分配面に関して、チュルゴが(少なくとも部分的には)本質的に古典派的枠組みにもとづいたのに対して、カンティロンの扱いは(混然としているものの)危険負担を強調して記述した、と対比できる。こうした対比は、スミスの記述において危険負担機能が資本利潤の副次的要因として位置づけられたという解釈と照らし合わせることで、認識の変遷についての1つの様相を導く。すなわち、ある消費水準に対する超過部分の原理的な説明要因として、(編年的に並べれば)当初は危険負担のみが想定されたが、その後資本や特殊労働とともに並列的に扱われ、やがて資本の規模が見出されるに至った、という変化である。こうした描写は、もちろんカンティロンが資本や特殊労働の役割を示唆しなかったことや、あるいはスミスが企業者による危険負担機能を認めていなかったことを意味しない。カンティロンは危険負担という要因によって個別な事情としての資本や特殊(監督)労働を一括して説明したのに対して、スミスは危険負担を資本に伴う機能として扱い、また労働の質を資本とは異なる議論に位置づけた、と解釈しているのである。もしそのような解釈が妥当するならば、資本/利潤の古典派的枠組みの成立にはそうした企業者の機能に関する認識を詳細に特定化すると同時に、それに一定の制限を課す必要があったことをも示唆する。

また、もし企業者の利潤が所得変動の危険負担のみによって説明されたのだとすれば、その必然的な発生が説明されなかったことを意味するであろう。そのことは、経済の長期状態の認識に関するカンティロンとチュルゴとの相違に対応する。Brewer (1995, 616)によれば、チュルゴは長期的な成長を明確に認識していたと言えるが、カンティロンはそうではなかった。カンティロンにおいては、ある企業者の超過利潤は必ずしも確実に獲得されるわけではなく、その限りで(a) その貯蓄の動機づけや(b) 生産過程への投入は必然的な行動とは考えられなかったのであって、いわんや(c) 資本蓄積も実現され難いと想定された。他方、チュルゴにおいては、(b) 生産過程への投入を通じて一定以上の超過利潤を実現する企業者が存在すると想定されたのであって²¹⁾、それを可能にする企業者にとっては(a) 貯蓄の十分な動機づけが認められ、(c) その結果として資本蓄積の実現に結びつくこと記述された。したがって、両者を分ける長期状態の記述に関してもそれぞれの企業者の行動に関する想定が本質的であると言える。

IV 考察

本稿では、資本/利潤に関する古典派的枠組みの成立局面を、次の4つの論点によって検討した。すなわち、(a) 所与の消費水準に対する超過利潤の可能性がどのように記述されたか、(b) 経済に投資機会が存在すると考えられたか、あるいは、それはどのような投資機会として想定されたか、(c) 投資が実行されたとして、その結果、経済にどのような変化が起こるとされたか、(d) そもそもその超過利潤はどのような主体行動を通じて獲得されると述べられたか、といった論点である。そうした観点からはカンティロンとチュルゴとの比較が興味深く、またその比較から導かれる含意によって、それぞれの体系がもつ特徴を明確化できた。従来の個別研究は、しばしばそれぞれの体系が(典型的解釈にもとづく)古典派の特徴を満たすかどうかという観点から展開されている。そうした問題意識の下では、カンティロンやチュルゴの体系がどのような意味で古典派的であるか、という点は明らかにされうるが、それぞれの体系が比較の上でどのような特徴をもつか、という点は明確にされえない。本稿の論点は、そうした従来の問題意識をより敷衍しており、それによってそれぞれの体系を特徴づけた。

さて、こうした比較の下では、古典派的枠組みの成立局面においては企業者概念に含まれる危険負担機能と資本概念との関係性の変化が本質的である、という解釈が得られた。またそのような企業者概念の変化が、たとえば Brewer (1995) の古典派の長期的成長の認識の成立に関する解釈とも関連していることを確かめた²¹⁾。そのことは、古典派やそれに先行する諸学説に関して、第一次近似的な解釈から進んだ理解を得るためには、それらを企業者概念と、より一般には主体や階級の扱いと関連づける研究が必要であることを示唆する²²⁾。他方で、企業者概念それ自体に着目し、その変遷を論じている研究も存在する (e.g., Hoselitz 1951; Hébert and Link 1988; 2009; Karayiannis 1990; Elkjaer 1991; Formaini 2001)。本稿は、そうした変遷が古典派的枠組みの成立との関連においてどのような意味をもつかを明らかにしており、それぞれ異なる問題意識の下での研究計画を結びつけている、とも位置づけられる。

本稿では、カンティロンやチュルゴ、スミス、それぞれの体系における諸概念の特徴やそれらの間の関係のみを取り扱った。それぞれの思想の枠組みは、それぞれの社会や制度の観測のもと

21) こうした企業者として資本家的企業者が想定されていた、と解釈するならば、Fontaine (1991; 1992a; 1993) の主張とも整合的である。注 19 も参照されたい。

22) 通常、企業者概念は経済の長期状態の記述と両立しない、と考えられる (cf. Baumol and Schilling 2008, 875-76)。たとえば、Hébert and Link (1988, 153 / 訳 184) は「企業者は静態的社会においては、せいぜい消極的な要素である。というのは、そこでの企業者の行為は、既に習得された過去の手順や技術の繰り返りに過ぎないからである。動態的な世界においてはじめて企業者は生き生きとした人物像となる」と述べる (cf. 米田 2005, 132-33)。チュルゴ、そしてスミスにおける経済の長期的な成長に関する記述は資本蓄積過程と強く関連づけられていた、と解釈されるのであるから、その文脈において企業者の危険負担機能の役割が後退していたのも必然と言える。

づいて構築された諸概念の組み合わせからなる。したがって、そこには現実と分析との一定の関係が何らかの形で表われていると考えられる。本稿では、そうした現実の制度と経済分析、それぞれの変化の関係について、階級と資本概念の成立との関係を一例に論じた。

(金子 創：慶應義塾大学経済学部)

参 考 文 献

- Aspromourgos, T. 1989. The Theory of Production and Distribution in Cantillon's *Essai*. *Oxford Economic Papers* 41 (2): 356-73.
- . 1996. *On the Origins of Classical Economics: Distribution and Value from Petty to Adam Smith*. New York: Routledge.
- . 2009. *The Science of Wealth: Adam Smith and the Framing of Political Economy*. New York: Routledge.
- . 2012a. Entrepreneurship, Risk and Income Distribution in Cantillon's *Essai*. In *Classical Political Economy and Modern Theory: Essays in Honour of Heinz Kurz*, ed. by C. Gehrke, N. Salvadori, I. Steedman, and R. Storn. London: Routledge, 105-19.
- . 2012b. Entrepreneurship, Risk and Income Distribution in Adam Smith. *European Journal of the History of Economic Thought*. DOI:10.1080/09672567.2012.683025.
- Baumol, W. J. and M. A. Schilling. 2008. Entrepreneurship. In *The New Palgrave Dictionary of Economics*, 2nd ed., II, ed. by S. N. Durlauf and L. E. Blume. Basingstoke, Hampshire: Palgrave Macmillan, 874-79.
- Berdell, J. 2009. Interdependence and Independence in Cantillon's *Essai*. *European Journal of the History of Economic Thought* 16 (2): 221-49.
- Blaug, M., ed. 1991. *Richard Cantillon (1680-1734) and Jacques Turgot (1727-1781)*. Aldershot, Hants: Edward Elgar.
- Brewer, A. 1987. Turgot: Founder of Classical Economics. *Economica* 54:417-28. Reprinted in Blaug (1991): 256-67.
- . 1988. Cantillon and the Land Theory of Value. *History of Political Economy* 20 (1): 1-14. Reprinted in Blaug (1991): 268-81.
- . 1992. *Richard Cantillon: Pioneer of Economic Theory*. New York: Routledge.
- . 1995. The Concept of Growth in Eighteenth-Century Economics. *History of Political Economy* 27 (4): 609-38.
- Cantillon, R. [1755] 1952. *Essai sur la nature du commerce en général: traduit de l'anglais*. Londres: Chez Fletcher
Gyle, ed. by Institut National d'Études Démographiques. Paris. [*Essai*]. 津田内匠訳『商業試論』所収、名古屋
大学出版会、1992、vii-xii、3-211.
- Casson, M. 1987. Entrepreneur. In *The New Palgrave: A Dictionary of Economics*, II, ed. by J. Eatwell, M. Milgate, and P.

23) 実際、こうした示唆は近年のいくつかの研究とも補完的である。たとえば、Aspromourgos (2012a; 2012b) は、カンティロンとスミス、それぞれにおいて、革新 (innovation) の実現や不確実性 (uncertainty) への直面といった現代的に認められている企業者機能 (cf. Casson 1987; Baumol and Schilling 2008) が含意されていたかどうかを論じている。それらの解釈によれば、カンティロンにはそうした想定が存在しなかったが、スミスには存在した。そうした解釈は、カンティロンからスミスへの概念上の変化の過程で、危険負担機能が企業者概念から分離され、資本機能に結びついたことと並行し、より本質的な企業者機能が認識された、という整理をも可能にする。金子 (2012) も参照されたい。また、カンティロンにおいては (文脈によっては) 企業者よりも地主が社会的機能を果たすと想定された (*Essai* 第1部第11-15章) が、Berdell (2009)、Kaneko (2012) などはそうした地主の役割についても論じている。注5も参照されたい。

- Newman. London: Macmillan, 151–53.
- Elkjaer, J. R. 1991. The Entrepreneur in Economic Theory: An Example of the Development and Influence of a Concept. *History of European Ideas* 13 (6): 805–15.
- Faccarello, G. 1992. Turgot et l'économie politique sensualiste. In *Nouvelle histoire de la pensée économique*, I, ed. by A. Béraud and G. Faccarello. Paris: La Découverte, 254–88.
- Faccarello, G. and P. Steiner. 2008. Interest, Sensationism and the Science of the Legislator: French 'philosophie économique', 1695–1830. *European Journal of the History of Economic Thought* 15 (1): 1–23.
- . 2012. 'Philosophie économique' and Money in France, 1750–1776: The Stakes of a Transformation. *European Journal of the History of Economic Thought* 19 (3): 325–53.
- Fontaine, P. 1991. 'Classes laborieuses' et 'classe disponible' chez Turgot: Essai de généalogie des comportements économiques. *Économies et Sociétés, série Economica* 15 (5): 93–116.
- . 1992a. Social Progress and Economic Behavior in Turgot. In *Perspectives on the History of Economic Thought*, VII, ed. by S. T. Lowly. Aldershot, Hants: Edward Elgar, 76–93.
- . 1992b. La théorie de l'entrepreneur de Turgot: commentaire. *L'Actualité économique, Revue d'analyse économique* 68 (3): 515–23.
- . 1993. The Capitalist Entrepreneur in Eighteenth-Century Economic Literature. *Journal of the History of Economic Thought* 15 (1): 72–89.
- Formaini, R. L. 2001. The Engine of Capitalist Process: Entrepreneurs in Economic Theory. *Economic and Financial Review* Fourth Quarter 2001:2–11. Federal Reserve Bank of Dallas. <http://www.dallasfed.org/assets/documents/research/efr/2001/efr0104a.pdf>
- Groenewegen, P. D. 1968. Turgot and Adam Smith. *Scottish Journal of Political Economy* 15 (3): 271–87.
- . 1970. A Reappraisal of Turgot's Theory of Value, Exchange, and Price Determination. *History of Political Economy* 2 (1): 177–96. Reprinted in Blaug (1991): 122–41.
- . 1971. A Reinterpretation of Turgot's Theory of Capital and Interest. *Economic Journal* 81:327–40. Reprinted in Blaug (1991): 142–55.
- , ed. 1977. *The Economics of A. R. J. Turgot*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- . 1983. Turgot's Place in the History of Economic Thought: A Bicentenary Estimate. *History of Political Economy* 15 (4): 585–616. Reprinted in Blaug (1991): 224–55.
- Hébert, R. F. and A. N. Link. 1988. *The Entrepreneur: Mainstream Views and Radical Critiques*, 2nd ed. New York: Praeger. 池本正純・宮本光晴 (第1版) 訳『企業者論の系譜—18世紀から現代まで』ホルト・サウンダース・ジャパン, 1984.
- . 2009. *A History of Entrepreneurship*. New York: Routledge.
- Hollander, S. 1987. *Classical Economics*. Oxford: Basil Blackwell. 千賀重義・服部正治・渡会勝義訳『古典派経済学—スミス, リカードウ, ミル, マルクス』多賀出版, 1991.
- Hoselitz, B. F. 1951. The Early History of Entrepreneurial Theory. *Explorations in Entrepreneurial History* 3 (4): 193–220. Reprinted in Blaug (1991): 75–102.
- Kaneko, S. 2012. Cantillon on Value: A Rational Reconstruction of the Roles of Landownership. *KES Discussion Paper Series*, Graduate Student No. 12–1. Keio University.
- Karayiannis, A. D. 1990. The Entrepreneurial Function in Economic Literature: A Synoptic Review. *Rivista Internazionale di Scienze Economiche e Commerciali* 37 (3): 245–68.
- Meek, R. L. 1962. *The Economics of Physiocracy: Essays and Translations*. London: George Allen and Unwin.
- . 1967. *Economics and Ideology and Other Essays: Studies in the Development of Economic Thought*. London: Chapman and Hall. 時永淑訳『経済学とイデオロギー—経済思想の発展にかんする研究』法政大学出版局, 1969.
- Murphy, A. E. 2004. Law and Turgot: The Importance of Money. Presented at the *Gimon Conference on French Political*

- Economy, 1650–1850*. Stanford University. http://www-sul.stanford.edu/depts/hasrg/frnit/pdfs_gimon/murphy.pdf
- . 2009. *The Genesis of Macroeconomics: New Ideas from Sir William Petty to Henry Thornton*. New York: Oxford University Press.
- Pelletier, G.-R. 1990. L'entrepreneur dans la pensée économique: l'originalité méconnue de Turgot. *L'Actualité économique, Revue d'analyse économique* 66 (2): 187–92.
- Prendergast, R. 1991. Cantillon and the Emergence of Theory of Profit. *History of Political Economy* 23 (3): 419–29.
- Schelle, G., ed. 1914, 1919. *Œuvres de Turgot et documents le concernant: avec biographi et notes*, II, III. Paris: Librairie Félix Alcan.
- Schumpeter, J. A. 1954. *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press. 東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史 (中)』岩波書店, 2006.
- Smith, A. [1776] 1981. An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations. In *the Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, 2, I*, ed. by R. H. Campbell and A. S. Skinner. Indianapolis, Indiana: Liberty Fund. [WN]. 大河内一男監訳『国富論 (1)』中央公論社, 1978.
- Spengler, J. J. 1952. Cantillon: l'économiste et le démographe. In *Essai sur la nature du commerce en général: texte de l'édition originale de 1755*, ed. by Institut National d'Études Démographiques. Paris, XLIII–LXIV.
- . 1954. Cantillon: First of the Moderns. II. *Journal of Political Economy* 62 (5): 406–24. Reprinted in Blaug (1991): 103–21.
- Turgot, A. R. J. [1766] 1914. Réflexions sur la formation et la distribution des richesses. In Schelle (1914): 533–601. [Réflexions]. 津田内匠訳『チュルゴ経済学著作集』所収, 岩波書店, 1962, 70–124.
- . [1767] 1914. Observations sur les mémoires récompensés par la Société d'Agriculture de Limoges. In Schelle (1914): 626–58. 津田内匠訳『チュルゴ経済学著作集』所収, 岩波書店, 1962, 125–48.
- . [1770a] 1919. Mémoire sur les plêts d'argent. In Schelle (1919): 155–202. English translation in Groenewegen (1977): 149–63.
- . [1770b] 1919. Lettres au Contrôleur Général (abbé Terray) sur le Commerce des Grains. In Schelle (1919): 265–369. English translation in Groenewegen (1977): 164–81.
- Vaggi, G. 1988. The Classical Concept of Profit Revisited. In *Perspectives on the History of Economic Thought, III*, ed. by D. E. Moggridge. Aldershot, Hants: Edward Elgar, 1–9.
- Walsh, V. and H. Gram. 1980. *Classical and Neoclassical Theories of General Equilibrium: Historical Origins and Mathematical Structure*. New York: Oxford University Press.
- 金子 創. 2012. 「カンティロンの「利潤」概念—「内在価値」および「企業者」との整合的解釈を通じて」『経済学史研究』54 (1): 83–101.
- 津田内匠. 1962. 「解題—チュルゴの経済思想形成の過程に即して」『チュルゴ経済学著作集』所収, 岩波書店, 1–18.
- . 1992. 「解説 カンティロン—企業者とディリジズムの経済学」『商業試論』所収, 名古屋大学出版会: 231–73.
- 中川辰洋. 2006, 2007. 「リシャール・カンティヨンと価格メカニズム—「経済学の揺籃」の意味するもの (I), (II)」『青山経済論集』58 (3): 53–86, (4): 87–114.
- . 2010. 「チャイルド・グルネー・テュルゴー—「資本」概念の形成と成立に関する一考察」『青山経済論集』62 (2): 55–95.
- . 2011a, b, c, 2012. 「テュルゴー資本理論研究—経済学の古典形成における意義と限界 (I), (II), (III), (IV・完)」『青山経済論集』63 (1): 1–40, (2): 19–56, (3): 113–52, (4): 81–120.
- 米田昇平. 1993. 「カンティロンの社会構成論—地主と企業者」『下関市立大学論叢』37 (2): 23–58.
- . 2005. 『秩序と欲求—18世紀フランス経済学の展開』昭和堂.

Cantillon and Turgot: The Relationship between the Classical Concept of Profit and the Pre-classical Concept of Entrepreneur

Soh Kaneko

Abstract:

This study focuses on Richard Cantillon's and Anne Robert Jacques Turgot's theories of the entrepreneur in order to revisit the conceptual structure of classical economic thought founded by Adam Smith. The frameworks of the classical concept of profit, assumed by Cantillon and Turgot are each examined to determine the following four issues: (a) whether a surplus of income over a given subsistence consumption level is distributed to an agent and whether it is saved accordingly; (b) whether and under what kinds of opportunity savings are invested; (c) whether capital accumulation is attained as a consequence of investment; and (d) whether and how a surplus is accrued.

Cantillon made four key assumptions in his work. First, he assumed that even if a surplus is distributed to an entrepreneur, it is not always saved. Secondly, whenever a surplus is saved, the savings are used only to buy land. Next, because savings are used only for land purchases, capital accumulation is hardly attained. Lastly, the surplus accrued by an entrepreneur is due to his risk-taking behavior.

By contrast, Turgot assumed that an entrepreneur normally saves the surplus that is distributed to him, and that saving is not only used to buy land, but also used for productive investment. He also assumed that because of this productive investment, capital accumulation can be achieved and that an entrepreneur could accrue a surplus from his risk-bearing, provision of advanced labor service, or investment.

This research, which takes into consideration each of their assumptions on the long-run state, provides a precise comparison between their frameworks of analysis of the entrepreneur. Furthermore, this comparison makes it possible to explain that the foundation of the classical framework was related to a change in the assumptions on the behavior of an economic agent.

JEL classification numbers: B 11, B 12.